

廃校の活用事例 学校がオフィス? 「面白そう」だけじゃない理由

旧大田小学校



担当者の声

つながりが生まれるきっかけに

株式会社ウェブレッジ
品質向上支援事業本部 森田 渉さん

私たちは、ITサービスの品質評価や実際に使いやすいかなどの検証を行っています。検証は、実際に使われる場面を再現するので、例えば、学校現場で使う製品は、学校という環境で検証することが重要です。さらに、学校は教室や体育館などスペースも広いので、大きくて大量のものでも検証できるメリットがあります。

9月には郡山市と協定を締結し、学校教育のDX推進や課題解決について協奏しています。例えば、市内の小学校で子どもたちの表情をデータで解析して、より集中できる授業のあり方を検討したり、ここでVR(仮想現実)などの最新技術

を体験してもらったり、学校の疑似環境を活かして貢献していきたいと考えています。

当初は、コワーキングスペースや交流スペースとして開放する想定もありましたが、新型コロナの影響で中断しています。それでも、オフィスが学校というのはインパクトがあるようで、市内の企業から体育館や校庭でドローンを使いたいとか、図書室でワークショップをしたいなど、問い合わせをいただきます。県外から視察にいらっしゃる方も多いですね。この場所をきっかけに繋がりが生まれているので、学校がオフィスであることの可能性にとっても期待しています。



実際の教室でVR(仮想現実)を使う想定をしながら検証を行う



図書室では市内事業者との意見交換やワークショップなどを実施



教室には、検証で使う電波遮断室も置かれている

旧鬼生田小学校



担当者の声

思い出の場所を存続させたい

株式会社エディソン
専務取締役営業本部長 高林 厚さん

4年前に、西田地区の学校が統合されると知り、地域の思い出の場所が無くなって手つかずになったら寂しいなという思いがありました。一方で、新人の教育研修を本社するには狭いとか、ここ数年震災や災害などが続き、もし万が一堤下町の本社ビルが被災した場合に、業務をどう継続するかという課題もありました。そういう意味では、小学校は耐震強度があるし、スペースも十分。考え出すと、いろいろな面でメリットがあると感じ、オフィスとしての活用を決めました。我々は電気設備の施工などを行いますが、今年の4月から、廃校をエディソンサステナブルサイトとして

活用を始め、営業部と通信事業部の社員8名が勤務しています。とても静かで集中できるので、仕事はかどりますね。通信事業部は、お客様の課題を既存の製品でどのように解決するか提案力が求められる部門。今後は、廃校内に実際の設備を用意して体験いただき、フィードバックをもらうなどの活用を考えています。

来春を目途に、校内の設備を整備し終えたら、地域の皆さんにお披露目する予定です。新型コロナの状況次第ですが、学校時代の思い出品を保管している「思い出館」や校庭・体育館で、地域の方や卒業生とのイベントなどを開催していきたいですね。



思い出品を保管している「思い出館」のイラストは社員が描いたもの



給食で使っていた器具など、当時のものはそのまま残している



きれいなデスクや椅子が並ぶ教室。本社とリモートで朝礼なども実施



特集1 「終わり」は「始まり」

知ってる? 廃校の今



未来を担う子どもたちを地域で支え合うシンボリックな場所、「学校」。少子化に伴い、廃校となる学校が年々増えています。学校として役目を終えた廃校は、今どのように使われているのでしょうか。

問 公有資産マネジメント課 ☎924-2051

企業が関心を寄せる廃校活用

少子化の影響で、2002年からの19年間に全国で8千580校が廃校になりました。平均すると毎年450校以上になります。

本市でも、年々児童数が減少しています。1995年からの25年間で、市内の小学生は実に8千600人ほど減少しており、今後も減っていくと予想されています。

本市では、2005年以降に15校が廃校になりました。現在、市内では9校の廃校が活用されています。そのうち4校は、災害物資や行政備品、市内で出土した考古資料の保管庫として使用したり(旧河内小学校夏出分校、旧福良小学校、旧高野小学校)、執務室を移転し、研修やICT教育の拠点にしています(旧三町目小学校)。

一方で、廃校は長い間地域に親しまれてきた場所なので、市は地域コミュニティの維持や活性化、産業振興などに有効活用してもらえよう廃校の情報を公開しています。事業者の方々が使い勝手の良いスペースや、既存施設の活用によるコストダウンなどに魅力を感じてもらえれば、市にとっても施設の売却や貸付により財源確保につながります。

今年から活用を始めた事業者を含め、現在では、5校の廃校が事業者の方々に活用されています。オフィスとして利用したり、地域の方に開放して思い出の場所として存続させたり、地域を意識した廃校の活用が始まっています。



旧上伊豆島小学校

廃校を活用しながら
地域と一緒に考える

平成31年3月に廃校となった熱海町上伊豆島地区の旧上伊豆島小学校。しかし、株式会社エフコムが新たにオフィスとして開所したエフコム ドリーム・ラボ上伊豆島では、事業者と地域住民が有効な活用方法を話し合う中で、少しずつ地域に変化が生まれています。

地域が大切にしてきたことを
大切にしたい



左から(株)エフコムの犬井賢一さん(人事総務部マネージャー、ドリーム・ラボ事務局)、山川克広さん(取締役、事業支援本部本部長)、本田昌志さん(執行役員、システム本部長)

2年前、廃校を活用する公募に手を挙げた(株)エフコム。「人が学び・働き・遊び・夢を形にする場」として地域住民や夢に向かってチャレンジする若手の力になりたいと、昨年3月に選定され、今年4月にエフコムドリーム・ラボ上伊豆島を開所しました。

「これまで地元のお客様に育ててもらってきたという思いを、地域に貢献する形で返していきたいと考えていました」と語る犬井さん。最初の地元説明会では受け入れてもらえるのか不



育成会の夏祭りです。

「育成会の担当者から夏祭りの相談を受けた時、新型コロナウイルスの状況を懸念し、飲食以外でできることは力になりたいと思いました。本当はそば打ちをして皆と一緒に食べたかったなあ」と笑って話す本田さん。その笑顔を見ると、自分たちも楽しんでいることが伝わってきました。夏祭りは、エフコム社員の知り合い

のサンドアート(砂を使って絵を描く)の講師にお願いし、学校の裏の敷地の砂を採って、初めてのサンドアートを体験。体育館での射的なども大盛況で大人も子どもも喜んでいましたそうです。

「終わり」は「始まり」

廃校がオフィスになり、交流が生まれたからこそ開催できたイベントがあります。さらに、ドリーム・ラボを知った上伊豆島小学校の卒業生から、自分も一緒に何かしてみたいという連絡も入っているそうです。廃校は、教育の場である学校としては「終わり」かもしれませんが、新たな地域交流の「始まり」なのかもしれません。一年の終わりが一年の始まりとしてつながっていくように。

交流会メンバー

心強いパートナーが来てくれた



上伊豆島部落会長
舟橋 壮介さん

地域のためにという姿勢で私たちの話をいつも真摯に聞いてくれているのでありがたいです。ITの知識やノウハウを活かした提案もあるので、心強いパートナーです。

発想力がすごい

イベントの企画でサバイバルゲームをできないかと提案されたり、地区対抗バレーボール大会の景品をパソコンにしているなど、一つ上をいく発想が出てくるので会議が楽しいです。



熱海公民館
上伊豆島分館長
谷代 義典さん



廃校になっても、思い出が引き継がれ
地域と企業の交流が、新たな「にぎわい」を創り出す
身近な場所で「持続可能」な新しい形が始まっています



ドリーム・ラボに住民から贈られたピアノの活用方法や地区対抗バレーボール大会などの話し合いも行われています(交流会)

回覧板が届くオフィス

ドリーム・ラボの玄関脇に置いてある箱には、回覧板が届きます。町内会の加入世帯に回す地域のお知らせがオ

キスに届く。ドリーム・ラボがまるで一つの世帯のように地域に溶け込んでいます。「夏には草刈り作業への参加依頼が来ますし、広報こおりやまも毎月届きますよ。私の自宅と同じです」と笑う山川さん。

交流会でイベントなどを企画

開所以降、定期的に交流会を開催し、ドリーム・ラボの活用方法や地域のイベントなどをざくばらんに話し合ってきました。そんな話し合いから企画して開催したイベントがあります。この夏に行われた下伊豆島地区の子ども